

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

平成 30 年 9 月 3 日	
所属部局・職	野生動物研究センター・修士課程学生
氏名	佐藤 侑太郎

1. 派遣国・場所 (〇〇国、〇〇地域)
日本、京都・紫蘭会館；東京・国際フォーラム；広島・東広島芸術文化ホール ケニア、ナイロビ・国連事務局、オルペジェタ自然保護区
2. 研究課題名 (〇〇の調査、および〇〇での実験)
国際シンポジウム EVOLINGUISTICS 2018 (京都)・丸の内キッズジャンボリー (東京)・第 27 回国際霊長類学会 (ケニア)・第 78 回日本動物心理学会 (広島)
3. 派遣期間 (本邦出発から帰国まで)
平成 30 年 8 月 9 日～平成 30 年 8 月 30 日 (22 日間)
4. 主な受入機関及び受入研究者 (〇〇大学〇〇研究所、〇〇博士／〇〇動物園、キュレーター、〇〇氏)
School of Psychology and Neuroscience, University of St Andrews, Dr. Matthias Allritz
5. 所期の目的の遂行状況及び成果 (研究内容、調査等実施の状況とその成果：長さ自由)
写真 (必ず 1 枚以上挿入すること。広報資料のため公開可のもの)の説明は、個々の写真の直下に入れること。 別途、英語の報告書を作成すること。これは簡約版で短くてけっこうです。
行程
8 月 9 日 (木)：京都・シンポジウム参加 8 月 13 日 (月)～16 日 (木)：東京・丸の内キッズジャンボリー 8 月 18 日 (土)～28 日 (火)：ケニア・国際霊長類学会、オルペジェタ自然保護区観察 8 月 29 日 (水)～30 日 (木)：広島・日本動物心理学会
京都・紫蘭会館にて、国際シンポジウム (“EVOLINGUISTICS 2018”)、マイケル・トマセロ教授の講演 (“Human Collaboration”)を聞いた。EVOLINGUISTICS 2018 は、ヒトのコミュニケーション、特に言語の進化起源に関する一連のシンポジウム／カンファレンスからなる。この講演は、そのうちの一つであり、当該分野における著名な研究者として知られるトマセロ教授のこれまで研究成果 (チンパンジー・ヒト幼児研究)が紹介され、それらをもとに議論が展開された。個々の研究が素晴らしいのは言うまでもなく、それらの成果を統合した精緻な考察を聞くことができ、感銘を受けた。
東京・国際フォーラムで開催された丸の内キッズジャンボリーでは、学生・研究者らによって種々の展示が用意され、多くの来場者で賑わった。このイベントは、各企業や団体が出展を企画し、主に小学生に学校では学ぶことができない体験を提供する催しである。昨年同様、筆者は PWS の出展を手伝った。その中で、筆者は主にチンパンジーの個体識別に関する展示を担当した (Fig. 1)。「チンパンジー」といっても顔や性格がそれぞれ違う、ということを知ってもらうことをねらった、簡単なゲームを用意した。手元のカードに描かれた写真のチンパンジーと同じ個体を、ホワイトボードに貼りだした 20 枚ほどの画像の中から探す、というものである。例えば顔のどういうところに特徴がある、などというヒントを出すことを通じ、来場者の方々とお話しすることができた。写真を注意深くみてもらうことで、一人一人顔が違うということを実感してい

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

ただけたのではないかと思います。一方で、見た目だけではなく、その性格や行動の違いにはあまり触れられなかった。そういった部分にも興味を持ってもらえるよう、工夫できればよかったかもしれない。



Figure 1. キッズジャンボリーの展示物の例。チンパンジー
個体識別クイズ（左）と様々な動物の写真展示（右）。

翌週、ケニア、ナイロビの国連事務局で開催された国際霊長類学会に参加した（Fig. 2）。海外での国際学会に参加するのは筆者にとって初めてのことであった。世界中から多くの霊長類研究者が集まり、連日朝から夜まで様々な発表を聞いたが、特に筆者の関心である大型類人猿の認知に関する最新の研究発表を聞くことができ、刺激を受けた。また、英語のリスニング能力を向上させるべきであると痛感した。筆者はポスター発表をおこなったが、様々な意見を伺うことができた。中でも、同じ手法を用いた研究をおこなっている研究者との会話は勉強になった。



Figure 2. 国際霊長類学会の会場となった国連事務局（左）、筆者のポスター（中央）、会場にいたサイクスモンキー（右）。

学会の後は、オルペジェタ自然保護区およびスウィートウォーター・チンパンジーサンクチュアリを見学した（Fig. 3）。自然保護区では、ゲームドライブやブッシュウォークを楽しむことができた。ゾウ、キリン、シマウマやウォーターバックなど、多彩な野生動物を短時間に見ることができた。中でも、野生のサイとクジャクは初めて見たために特に印象的であった。サンクチュアリでは、チンパンジーの夕食に立ち会うことができた。チンパンジーたちは、複数の見学者を目前にしても特に変わった様子は見せず、ヒトに慣れている様子であった。今回は一部しか見ることができなかったが、広大な敷地には屋外放飼場があり、室内には実験装置もあった。また、スタッフが日々行動観察をおこない、研究者とも連携しているとのことであった。設備やその生

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

活を含め、もう少しゆっくりと見られればよかったが、一部だけでも見ることで勉強になった。



Figure 3. 自然保護区のウォーターバック（左）、ゾウ（中央）、サンクチュアリのチンパンジー。ウガリを食べていた（右）。

広島・東広島芸術文化ホール「くらら」で開催された日本動物心理学会では、口頭発表をおこなった（Fig. 4）。聞いてくださった方々とお話することができて大変参考になった。特に興味があった手法についてお話しを聞くことができたのは有益であった。また、発表奨励賞に申し込んでいたため、その審査結果のフィードバックもいただくことができた。研究目的の明確さや議論の論理性などが今後の課題のようである。これは、他の方の発表を聞いていても実感することであった。今後の発表の参考としたい。



Figure 4. 動物心理学会の会場となった東広島芸術文化ホール。

6. その他（特記事項など）

丸の内キッズジャンボリーでお世話になりました他の出展参加者のみなさまに御礼申し上げます。また、今回のケニア渡航において、Matthias Allritz 博士、Manuel Bohn 博士、Christoph Voelter 博士を含む University of St Andrews の方々、京都大学高等研究院の狩野文浩准教授、(株)アートツーリストのみなさま、PWS 支援室の左海陽子氏の多大なご協力を賜りました。ここに深謝いたします。